

第 70 回歴史探訪の会 1970 年大阪万博の象徴「太陽の塔」を見学

実施日： 令和元年 7 月 18 日 (水曜日)

場所： 千里中央万博記念公園

案内者： 森 尚夫

梅雨がまだ明けない天候で少し心配しましたが 34 名のご参加をいただき「太陽の塔」内部を見学いたしました。

アジア初の万博で当時来場 6,421 万人を集め戦後最大のイベントでした。“太陽の塔”は大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」を表現するパビリオンとして建てられた作品です。芸術家、岡本太郎が制作した建造物で万博閉幕後、パビリオンは撤去されましたが太陽の塔は永久保存が決められました。内部は半世紀にわたり扉を閉ざしていましたが、2018 年に復元再生を行い常設展示施設に生まれ変わりました。



モノレール万博記念公園前駅に集合



万博記念公園に向かって移動中



万博記念公園入口付近



公園内で太陽の塔を眺めながら

「太陽の塔」外観・・・“3つの顔”

頂上にある黄金の顔は未来を象徴する、お腹にある太陽の顔は現在を象徴する。背面の黒い顔は過去を象徴しています。



「太陽の塔」正面

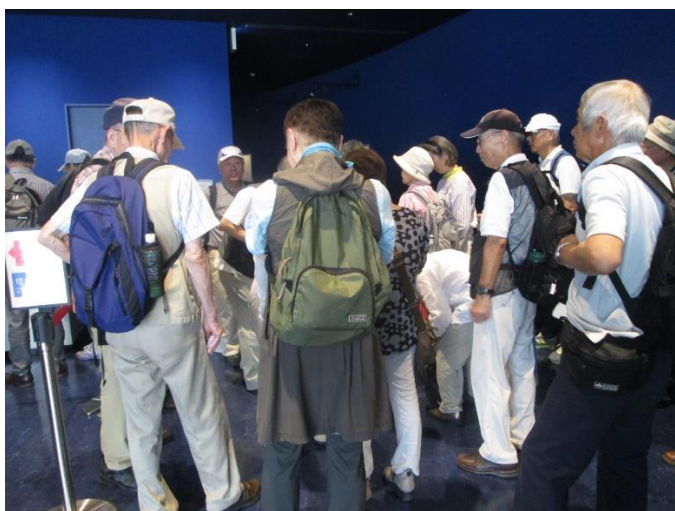


背面です

「太陽の塔」

高さ 70m、基底部の直径 20m、腕の長さ 25mその風貌は西洋・日本美の伝統からも外れていて世界的にも見たこともないだけに作者岡本太郎も何も語らず、残念ながらよくわかりません。大阪万博テーマが「人類の進歩と調和」でテーマ館が過去—未来—現在を巡る構成であり 3つの顔については明確にわかっています。



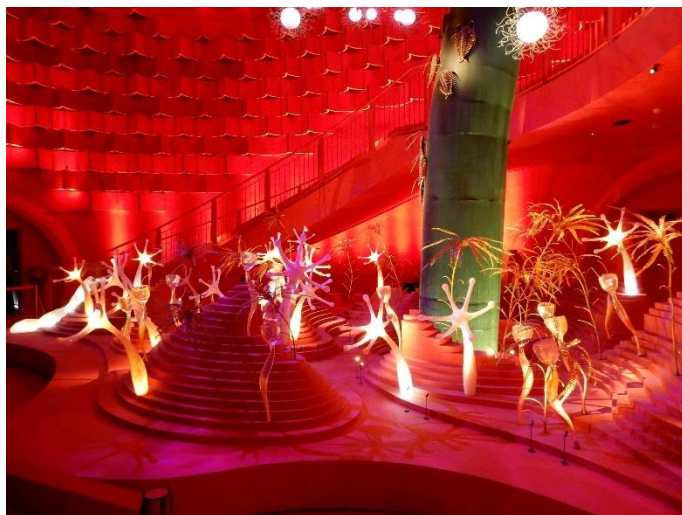
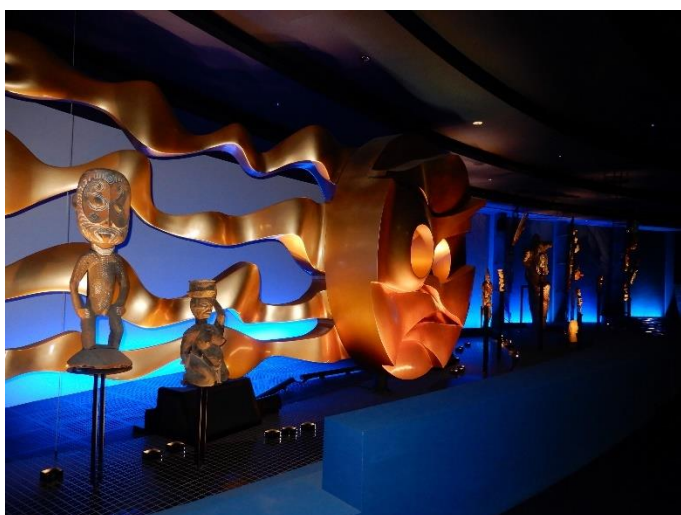


いよいよ「太陽の塔」の内部見学がはじまります。内部では1階の展示部分以外は撮影が禁止されており、残念ながら内部の写真はあまりありません。

「太陽の塔」内部・・・“生命の樹”

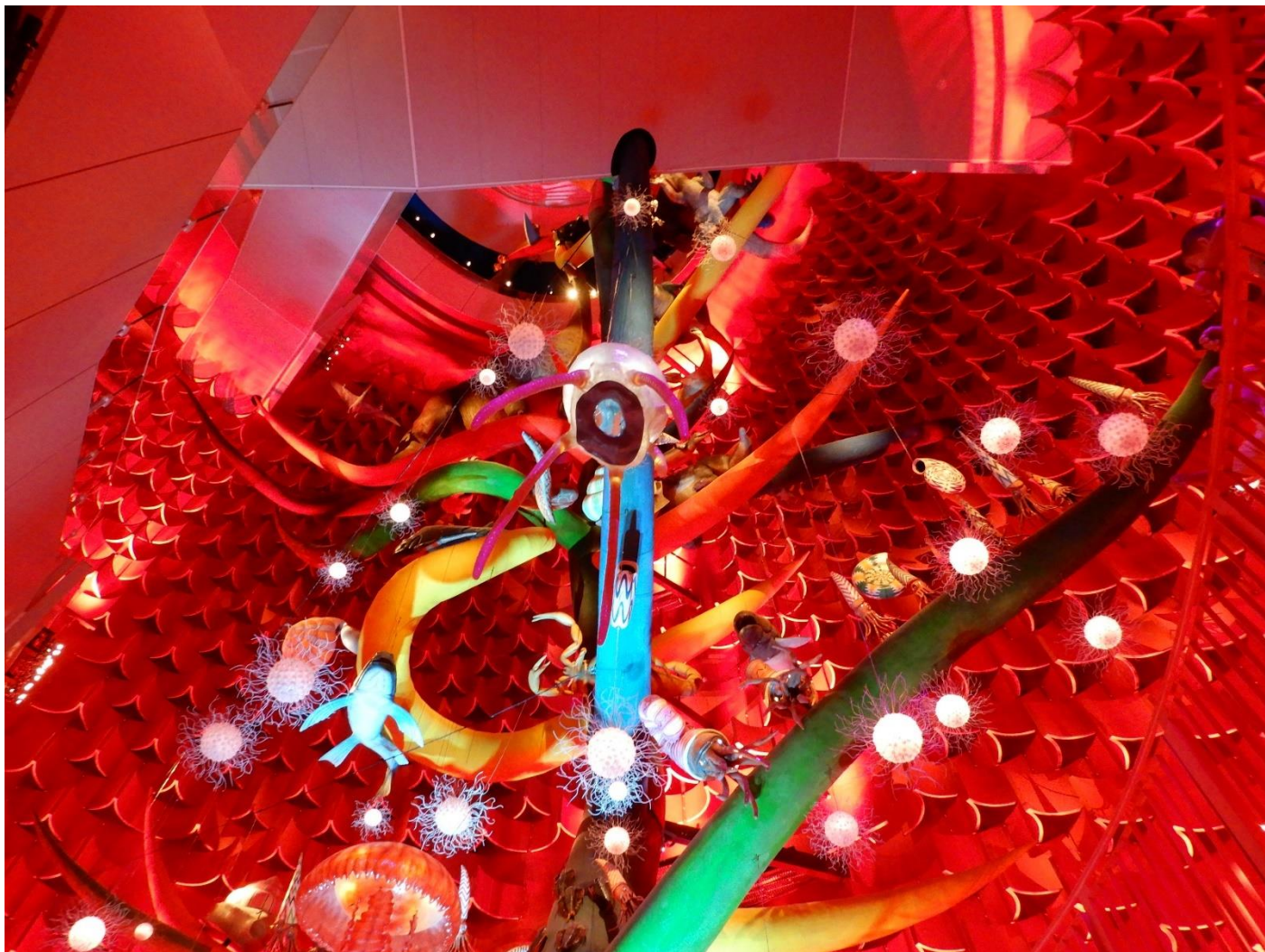
太陽の塔の胎内には地下から上へ上へと伸びる前代未聞のオブジェがそびえています。岡本太郎が構想した高さ41mにおよぶ巨大造形<生命の樹>です。

天空に伸びる1本の樹体に、単細胞生物からクロマニヨン人迄、生物進化をたどる33種類もの“生き物”がびっしりと貼りつく独創的なインスタレーションで、世界にも類がありません。再生した胎内空間を地下から上へ塔内をのぼりながら両腕をむすぶ回廊まで登りました。



<生命の樹>

下から上に向かって原生類から哺乳類へと進化していきます。これだけの生き物の展示には長い間に傷んだものもありましたが綺麗に復元され、なかでも巨大恐竜が地震にも耐え現存していました。

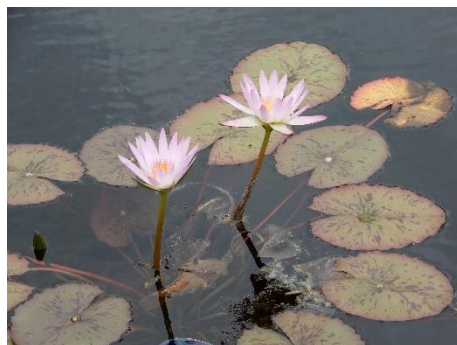
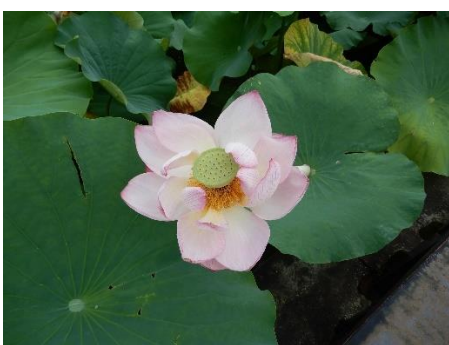


1970年の万博当時感動した見事な太陽の塔の胎内でした。

今回は戦後、昭和の大イベント、6,400万人が感動した万国博覧会が開かれた大阪千里丘陵を訪ねました。、シャープにとって大変思いで深い「千里より天理」、パビリオンを出展せず研究所を建設し、液晶のシャープの時代を築きました。

自然公園

自由解散の後、公園内で昼食、その後日本庭園に見ごろの蓮の花など鑑賞、当時を目と耳、全身で感じながら太陽の塔の見学会を終りました。





「太陽の塔」を背景にして

写真は田原さん、井門さん、岸場さんが撮影したものを使用させて頂きました。